

# エジプト学研究第 22 号 2016 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

## 目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2015 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 23 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・高橋寿光・竹野内恵太・山崎美奈子・福田莉紗	15
第 24 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報	吉村作治・河合 望・近藤二郎・高宮いづみ・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・松永修平・山崎世理愛	29
アブ・シール南丘陵遺跡第 23 次・第 24 次調査保存修復作業	苅谷浩子・柏木裕之・高橋寿光・河合 望・吉村作治	41
第 12 次アブ・シール南丘陵遺跡調査において出土した集団埋葬墓人骨の人類学的分析（予報）	坂上和弘・馬場悠男・平田和明	51
非破壊オンサイト蛍光 X 線分析によるアブ・シール南丘陵遺跡集団埋葬墓出土遺物の化学的特性化	阿部善也・大越あや・内沼美弥・扇谷依李	69
エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 22 次調査—	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・竹野内恵太・山崎世理愛	91
第 8 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・竹野内恵太・福田莉紗	113
〈論文〉		
エジプト先王朝時代ネケンにおける石製容器の穿孔法—石器使用痕観察と穿孔実験からの推定—	長屋憲慶	149
〈研究ノート〉		
古代エジプトの親族名称研究の現状と課題	齋藤久美子	167
画像資料からみたエジプト中王国時代の装身具研究序論	山崎世理愛	179
〈動向〉		
埃及学指南のための覚書	河合 望	205
〈活動報告〉		
2015 年度 日本エジプト学会活動報告		229
2015 年 エジプト調査		233

# The Journal of Egyptian Studies Vol.22, 2016

## CONTENTS

Preface .....	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2015, Project of the Solar Boat .....	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Twenty-Third Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2014 .....	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI, Minako YAMASAKI and Risa FUKUDA.....	15
Preliminary Report on the Twenty-Fourth Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2015 .....	Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Izumi TAKAMIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Shuhei MATSUNAGA and Seria YAMAZAKI .....	27
Preliminary Report on the Conservation Work at North-West Saqqara in 2014 and 2015 Seasons .....	Hiroko KARIYA, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Nozomu KAWAI and Sakuji YOSHIMURA .....	41
Report on the Study of Human Skeletal Remains from the Multiple Burial in Northwest Saqqara, Egypt -Preliminary report- .....	Kazuhiro SAKAUE, Hisao BABA and Kazuaki HIRATA.....	51
Chemical Characterization of Artifacts Excavated from an Intact Multiple Burial at Northwest Saqqara by Nondestructive Onsite X-ray Fluorescence Analysis .....	Yoshinari ABE, Aya OKOSHI, Miya UCHINUMA and Eri OGIDANI.....	69
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Twenty-Second Season .....	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Seria YAMAZAKI.....	91
Preliminary Report on the Eighth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition .....	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	113
Articles		
Stone Vessel Drilling Method at Predynastic Nekhen, Hierakonpolis: Perspectives from Use-wear Trace Analysis and Experimental Drilling. .....	Kazuyoshi NAGAYA .....	149
Current Status and Issues of Kinship Terminology in Ancient Egypt .....	Kumiko SAITO .....	167
Introduction to a Study on Personal Adornments of the Middle Kingdom in Ancient Egypt through the Iconographic Analysis .....	Seria YAMAZAKI.....	179
Note on the current research tools for Egyptology.....	Nozomu KAWAI.....	205
Activities of the Society, 2015-16.....		229
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2015.....		233

# 図像資料からみたエジプト中王国時代の 装身具研究序論

山崎 世理愛\*

## Introduction to a Study on Personal Adornments of the Middle Kingdom in Ancient Egypt through the Iconographic Analysis

Seria YAMAZAKI\*

### Abstract

In the Middle Kingdom of Egypt, some personal adornments were depicted in objects such as coffins and figurines. Scholars have used those pictures to show how ancient Egyptian people wore personal adornments. However meanings of each adornment have not been clear.

This paper aimed to reveal meanings of personal adornments depicted in *frise d'objets*, masks, anthropoid coffins, "Paddle dolls" and truncated Middle Kingdom female figurines. The results indicated that each object bore different kinds of personal adornments; funerary objects including *frise d'objets*, masks and anthropoid coffins usually showed broad collars and sweret-beads while two kinds of female figurines, called dancers in this world, often depicted cowry-shell girdles and body-chains. It suggested that broad collars and sweret-beads were necessary for funerary ritual, whereas cowry-shell girdles and body-chains were used in this world as well as grave goods and their most important function was not to complete funerary ritual but probably to protect women or/and show femininity.

Moreover, a lot of differences between unearthed personal adornments and iconographies were observed. Most actual broad collars were found from the Memphis-Fayum region while coffins and masks showing broad collars were used more widely. Furthermore, pictures of personal adornments were decorated more elaborate than actual objects. Therefore it is argued that people substituted pictures for real personal adornments.

Not only broad collars and sweret-beads but also cowry-shell girdles were used as grave goods. In addition, pectorals, torques and finger-rings, which were not shown in iconographies, were also found from tombs. Pectorals seemed to be prestige goods and torques and finger-rings derived from foreign cultures. The results confirm that personal adornments used for grave goods had various roles such as showing gender and identity as well as completion of funerary ritual.

---

\* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

\* Graduated Student, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

## 1. はじめに

本稿では、エジプト中王国時代に副葬品として利用された装身具の役割について、図像資料をもとに考える。さらに、実際の出土資料との比較をおこなうことで、中王国時代の埋葬における装身具選択の一側面を明らかにする。これまで古代エジプトの装身具に関しては、王族の墓から出土したものを仔細に紹介するなど、定性的な研究が主であった。また、木棺や小像に描かれた装身具については、装身具の利用形態を示すための類例として提示されるに留まっていた。しかし、これらに描かれた装身具の種類は様々であるがゆえに、媒体ごとに整理し横断的な比較検討が必要であると考えられる。それら媒体はそれぞれ葬送時における機能や意味合いが異なるため、こうした作業を行うことで、当時装身具がどのような意味合いの下で利用されていたのかを描出できよう。そしてこれは、最終的に装身具研究全体に寄与すると考えられるのである。本稿ではその第一段階として、オブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*)、マスク、人形木棺、“Paddle doll”と呼ばれる木製女性小像、ファイアンス製女性小像を対象とする。これらを体系的に整理し、媒体によってどのような装身具が描かれ、それらはどのような意味を帯びていたのかについて考えたい。

最後に、中王国時代の葬送に際して、副葬される装身具はどのような意図のもと選択されたのかを本稿で対象とした図像資料から考察する。

## 2. 古代エジプトの装身具に関する先行研究

古代エジプトでは、多種多様な装身具が副葬品として利用されたものの、これまで装身具研究が十分になされてきたとは言い難い。その理由の一つとして、ビーズ製の装身具は出土時に多くが本来の形状を失ってしまうという点が挙げられる。そのため装身具に関する先行研究は、ビーズ・護符の形態分類やそれぞれが持つ意味を追求する研究 (Petrie 1914; Andrews 1994; Xia Nai 2014) と特定の出土例や図像資料を対象とした定性的な研究 (Aldred 1971; Wilkinson 1971; Andrews 1990; Grajetzki 2014) が主流となっている。これらの研究は古代エジプトで利用された装身具の大枠を明らかにしたものの、いずれも地域・時期による出土傾向やその変化など具体的な分析結果は示していない。しかし、最近ではごく僅かではあるが、定量的な分析から副葬された装身具と社会との関係を模索する研究もおこなわれつつある (e.g. Gashe 2007)。

古代エジプトの装身具は、実物が副葬品として利用されたほか、図像としても様々な媒体に描かれた。それら媒体には、木棺、マスク、小像、ステラ、壁画などが挙げられる。箱形木棺に描かれたオブジェクト・フリーズについては、装身具に限定した分析ではないが、描かれた器物の性質がジェキエ (Jéquier, G.) やラコー (Lacau, P.)、ウィレムズ (Willems, H.) らによって明らかにされている (Jéquier 1921; Lacau 1904, 1906; Willems 1988)。まずラコーは、木棺の集成を通してオブジェクト・フリーズに描かれた図像の種類ごとにまとめた。そして、ジェキエはオブジェクト・フリーズに描かれた各器物の名称を同定した。これらの研究を下地に、ウィレムズはオブジェクト・フリーズが描かれた位置や示される器物の時期的な変化を明らかにしたのである。その他先行研究では、古代エジプトで利用された装身具の種類を明らかにするために、特定の図像資料が取り上げられてきた。しかしながら、複数の媒体を対象とした整理や分析はされていない。

このように、古代エジプトの装身具については各研究者によって断片的な見解は示されているものの、いまだ蓄積が浅く、さらなる分析と考察が待たれる状況にある。

## 3. 本稿の目的と方法

本稿では、装身具が表現された中王国時代の図像資料をもとに、当該期には各装身具がどのような役割を担っていたのかを考える。また、出土遺物と図像資料との比較をおこなうことで、両者の関係性について考

察したい。

図像資料の分析では、具体的に①各媒体にどのような装身具が描かれたのか、②それら装身具にはどのような役割があったのかという主に2点の考察を目的とする。そのために、オブジェクト・フリーズ、マスク、人形木棺、2種類の女性小像の中で装飾が観察できるものを対象とし、それぞれに描かれた装身具の種類を同定・類型化する。そして、媒体の性質を考慮して各装身具が担った役割を類推する。なお、資料集成に際しては基本的に発掘報告書と博物館所蔵資料<sup>1)</sup>を用いて表現された装身具を媒体ごとにまとめる。ただし、オブジェクト・フリーズに関しては、先行研究の中から装身具に焦点を当ててまとめ直す。

続いて、出土遺物との比較では、①出土資料と図像資料における装身具の種類の違いと②実際の出土傾向と図像資料の分布状況の違いを考察し、装身具の図像表現が持つ意味を描出することが目的である。墓から出土した装身具の種類や地域性については、これまでの拙稿で一定の成果が得られている。それをふまえ、第5章で出土遺物と本稿で扱った図像資料との比較をおこなう。

## 4. 装身具が描かれた図像資料について

### 4-1. オブジェクト・フリーズ

オブジェクト・フリーズとは、中王国時代の箱形木棺内側に描かれた装飾の一つで、日用品や儀式で使う器物の図像が並んだ箇所を指す。図像だけでなく、各器物の名称や素材、副葬品としての配置場所が文字としても記される場合がある。オブジェクト・フリーズの役割については、死後に必要とされる物を示した副葬品の一覧表である可能性が指摘されている (Andrews 1984: 41; Snape 2011: 143)。主に中王国時代前半の箱形木棺に施され、中王国時代後半にはあまり見られなくなる。

表1と図1には、ジェキエ (Jéquier 1921) とウィレムズ (Willems 1988) の研究を参考に、オブジェクト・フリーズに描かれた装身具をまとめた。これらを見ると、オブジェクト・フリーズには極めて多くの種類の装身具および護符が描かれていたことが分かる。中でも、最も頻繁に描かれた装身具は、錘と共に描かれた襟飾りと幅広腕輪 (足輪) であった (Willems 1988)。

表1 オブジェクト・フリーズに描かれた装身具の種類 (筆者作成)

Pl.1 Personal adornments represented in the *frise d'objets*

描かれた装身具	詳細
環状頭飾り	多様な装飾が施された環状の頭飾りとして描かれた
襟飾り	半円形、ハヤブサ頭形ターミナルが付属したものや襟飾り全体がハヤブサの形状をしたものが描かれた
襟飾り用錘	半円形、ハヤブサ頭形ターミナルが付属し襟飾りと共に描かれた
メナト首飾り	多数のビーズ束から構成され、錘が伴って描かれた
セウエルトビーズ	赤色の樽形ビーズで、しばしば両端に緑色の球形ビーズが描かれた
ウアジュビーズ	緑色の円筒形あるいは樽形ビーズで、しばしば両端に赤色の球形ビーズが描かれた
一連首飾り	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズが連なったタイプがある。スカラベ等の護符が描かれる場合もある。
二枚貝形護符付き一連首飾り	二枚貝形護符の連なりからなる首飾りとして描かれた
一連腕輪/足輪	同形状のビーズが連なったように描かれた
幅広腕輪/足輪	円筒形ビーズとスペーサービーズで構成された幅の広い腕輪/足輪として描かれた
幅狭腕輪/足輪	円筒形ビーズを数段連ねた腕輪/足輪として描かれた
金属腕輪/足輪	金属板を湾曲させた形状のものが描かれた
「下エジプト王様式の衣装」	ビーズ製エプロン、ツバメ形護符、動物の尻尾が描かれた
その他護符	動物やヒエログリフを象ったものが多数描かれた



図1 オブジェクト・フリーズに描かれた装身具の例

(環状頭飾り Lacau 1906, fig.491; 襟飾り Lacau 1906, fig.429; 襟飾り用錘 Lacau 1906, fig.442; メナト首飾り Lacau 1906, fig.472; セウェレトビーズ Lacau 1906, fig.445; ウアジュビーズ Lacau 1906, fig.454; 一連首飾り Lacau 1906, fig.454; 二枚貝形護符付き一連首飾り Lacau 1906, fig.467; 一連腕輪/足輪 Lacau 1906, fig.458; 幅広腕輪/足輪 Lacau 1906, fig.425; 幅狭腕輪/足輪 Lacau 1906, fig.437; 金属腕輪/足輪 Jéquier 1921; 「下エジプト王様式の衣装」 Lacau 1906, figs.400, 95, 408; その他護符 Lacau 1906, figs. 92, 90, 100, 115, 112, 80)

Fig.1 Examples of personal adornments represented in the *frise d'objets*

#### 4-2. マスク

第一中間期から利用されたマスクは、亜麻布の上にプラスターを塗ったカルトナーージュと呼ばれる素材で製作され、中王国時代においてもその伝統が引き継がれた。マスクは人物の上半身を表現しており、カー(Ka)やバー(Ba)がミイラとなった死者を見分けるために被せられたと言われている(Andrews 1984: 33)。マスクの詳細な研究としては、ヴィラ(Vila, A.)によるミルギッサ遺跡出土のマスクに関するものが挙げられる(Vila 1976)。ミルギッサ遺跡からは大量のマスクが出土しており、ヴィラはそれらを集成し、細部の

表現方法を丹念に観察した上で分類をおこなっている。ただし、その多くが完全形ではなく主にマスクの顔部分のみが残存した状態で出土した資料であるため、胸部分に描かれた装身具の全体を観察できるものは極めて少ない。

マスクに描かれた装身具には、環状頭飾り、セウエルトビーズ、一連首飾り、襟飾りが挙げられる。襟飾りは対象資料全てに確認された。そして、本稿で対象とした13点のマスクは、装身具の表現方法によって3つのタイプに分けられた(図3-5)<sup>2)</sup>。また、タイプの違いは概ねマスクが利用された地域や時期の違いと一致することが判明した(山崎 2016)。タイプ1(資料番号1~6)は、全て中王国時代前半中部エジプト地域出土のマスクに該当し、タイプ2(資料番号7~11)は1点のみ中部エジプト地域の出土であったが、他は全て中王国時代前半のメンフィス・ファイユーム・南部エジプト地域出土のマスクであった。最後にタイプ3(資料番号12, 13)は、中王国時代後半のメンフィス・ファイユーム地域とミルギッサ遺跡出土のマスクに該当した。以下では、描かれた装身具の詳細をタイプごとに見ていく。

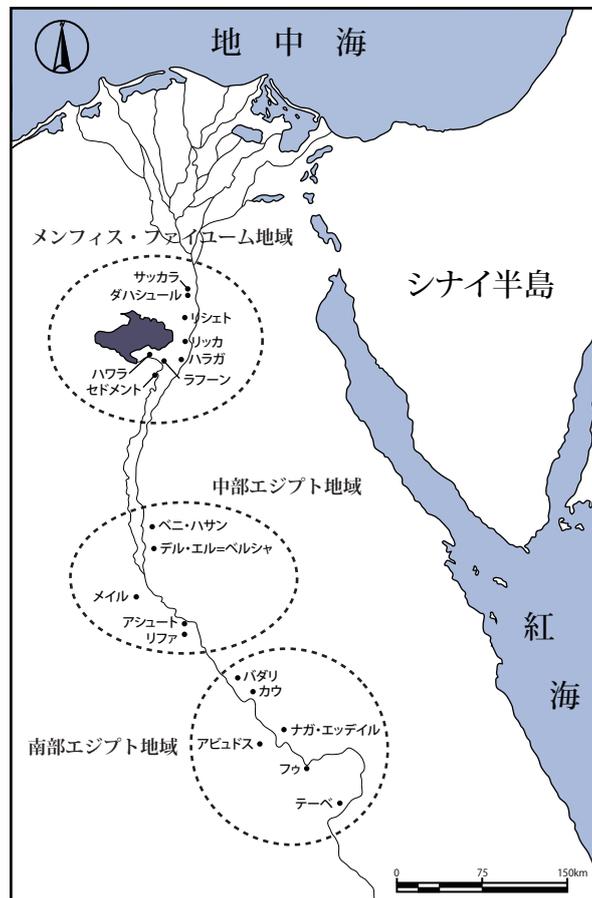


図2 エジプト全図  
(Baines and Malek 1996 をもとに筆者作成)  
Fig.2 Map of ancient Egypt

まず、タイプ1(図3)には欠損により観察不可能なものと同メイル遺跡出土の1点(資料番号6)を除くと全てに環状頭飾りの描写が見られた(表2)。襟飾りに関しては、他タイプのマスクに施されたものと配色が異なるほか、装飾が多い傾向にある。特に資料番号2,3には、円筒形だけではなく樽形など様々な形態のビーズで襟飾りが表現されている。また、資料番号2,3,6にはセウエルトビーズが描かれており、いずれも赤色樽形ビーズの両端に青あるいは緑色円筒形ビーズが配置されていた。次に、タイプ2(図4)に分類されるマスクには、襟飾りと一連首飾りが観察された。襟飾りは全て赤・青・緑色で彩色が施され、最上段はいずれも赤色である。また、5点中3点に首の後ろの錘へ続く紐の表現が見られた。そして、4点に一連首飾りが描かれていたが、これらは全て同じ形態であったとみられる3)。それは、2点の青色円筒形ビーズの間に2点の赤色樽形ビーズが配置されており、セウエルトビーズとウアジュビーズを組み合わせたような形態である。装身具の表現方法における高い統一性は、図4からも見て取れる。タイプ3(図5)に分類されるマスクは本資料には2点のみ含まれていた。襟飾りはやはり赤・青・緑色で彩色が施されたが、タイプ2とは異なり、青、赤、青、緑、青、赤、青、緑色・・・というパターンで彩色されている。また、錘へ続く紐の表現は見られない。さらに、資料番号12にはセウエルトビーズが描かれているが、タイプ1とは違って赤色樽形ビーズの両端に緑色球形ビーズが配置された形態である。

表2 本稿で対象としたマスクの詳細(筆者作成)  
Pl.2 List of masks analyzed in this paper

資料番号	出土地	墓番号/被葬者名	時期	表現された装身具				備考	参考文献・資料
				環状頭飾り	襟飾り	セウエルトビーズ	一連首飾り		
1	アシュート	-	11王朝	+	+	-	-	首部分に描かれた青色縞模様の装飾が襟飾りの一部か他の装身具を示しているのかは不明	Eggebrecht 1993, p.44, fig.34
2	アシュート	-	11王朝	+	+	+	-	-	Eggebrecht 1993, p.45, fig.35
3	アシュート	-	11王朝~12王朝初期	+	+	+	-	セウエルトビーズは襟飾りに組み込まれている	D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988, p.119; Museum of Fine Arts Boston 1987.54
4	アシュート	-/ケティゲル	第12王朝	+	+	-	-	-	Museum of Cairo (おそらくCG36279)
5	デル・エル=ベルシャ	tomb 10, Shaft A/ジェフティナクト	11王朝後半~12王朝初期	?	+	?	?	上部欠損	Museum of Fine Arts Boston 21.423
6	メイル	-/イウイ	第12王朝	-	+	+	-	-	Lacau 1904 (CG28073)
7	メイル近郊	-/セネビ	第11王朝	-	+	-	+	下部欠損	Museum of Cairo (S.R.172)
8	サッカラ、テティピラミッド墓地	tomb HMK30/ゲムニ	アメンエムハト1世	-	+	-	+	襟飾り用錘に続く紐あり	Firth and Gunn 1926, pl.27 A
9	サッカラ	-	中王国	-	+	-	+	下部欠損。襟飾り用錘に続く紐あり。	Museum of Cairo (S.R.178)
10	アル=アサシーフ	MMA 1102/ウアフ	アメンエムハト1世	-	+	-	-	襟飾り用錘に続く紐あり	Roehrig 2003; Metropolitan Museum of Art 40.3.54
11	-	-	中王国	-	+	-	+	-	Museum of Cairo (RT24.4.26.1)
12	ダハシュール北	Shaft 42/セヌウ	第13王朝	-	+	+	-	頭部を覆うようにハゲワシが描かれているが、装身具を表現しているのかは不明	Baba and Yoshimura 2010, p.10
13	ミルギッサ	tomb 130/イベト	第12王朝末	?	+	?	?	状態悪	Pellerin et al. 2014, p.219; Louvre Museum E26061

+ = 描写あり, - = 描写なし, ? = 不明

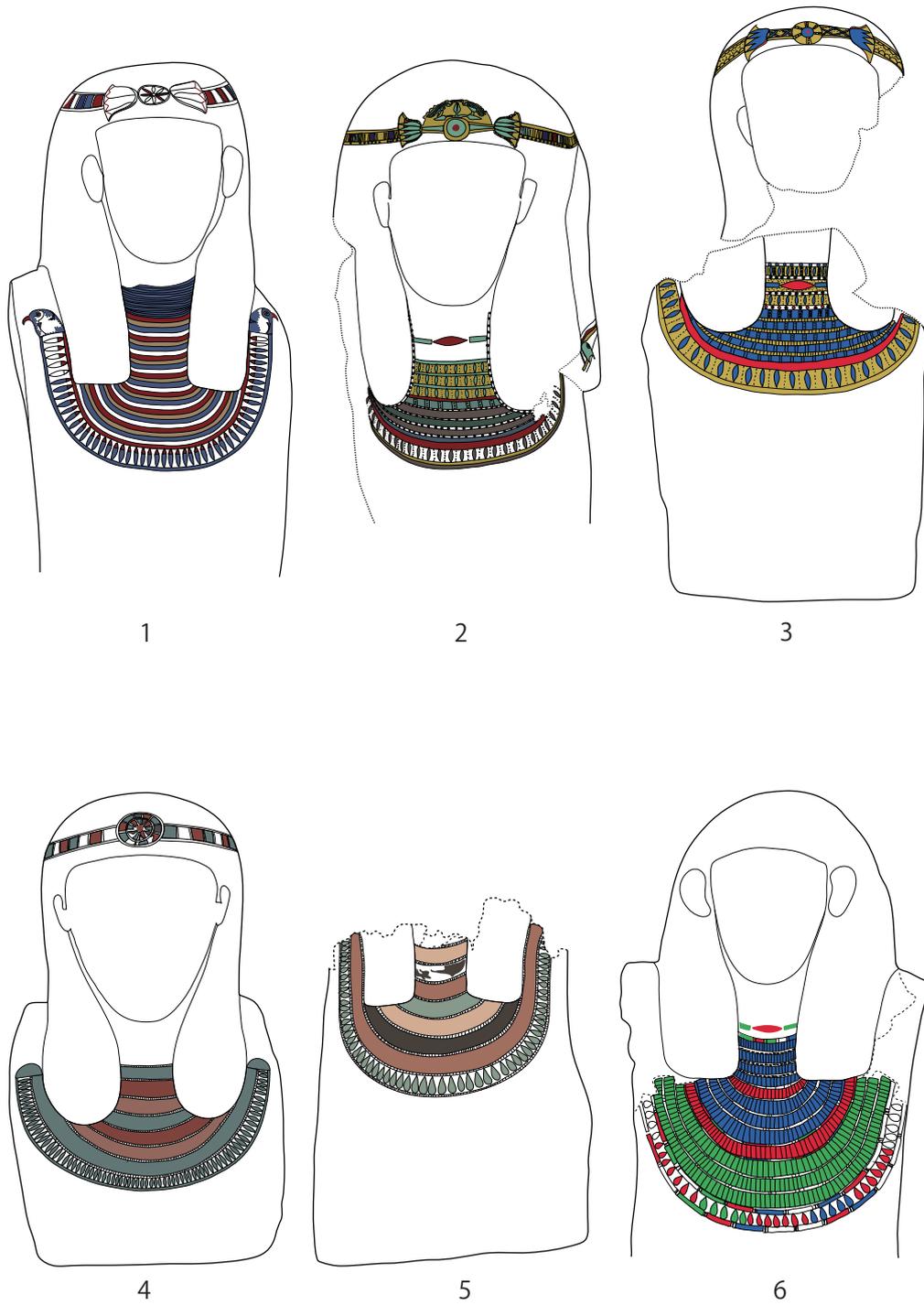


図3 タイプ1のマスクにおける装身具の表現  
(表2における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
Fig.3 Type 1

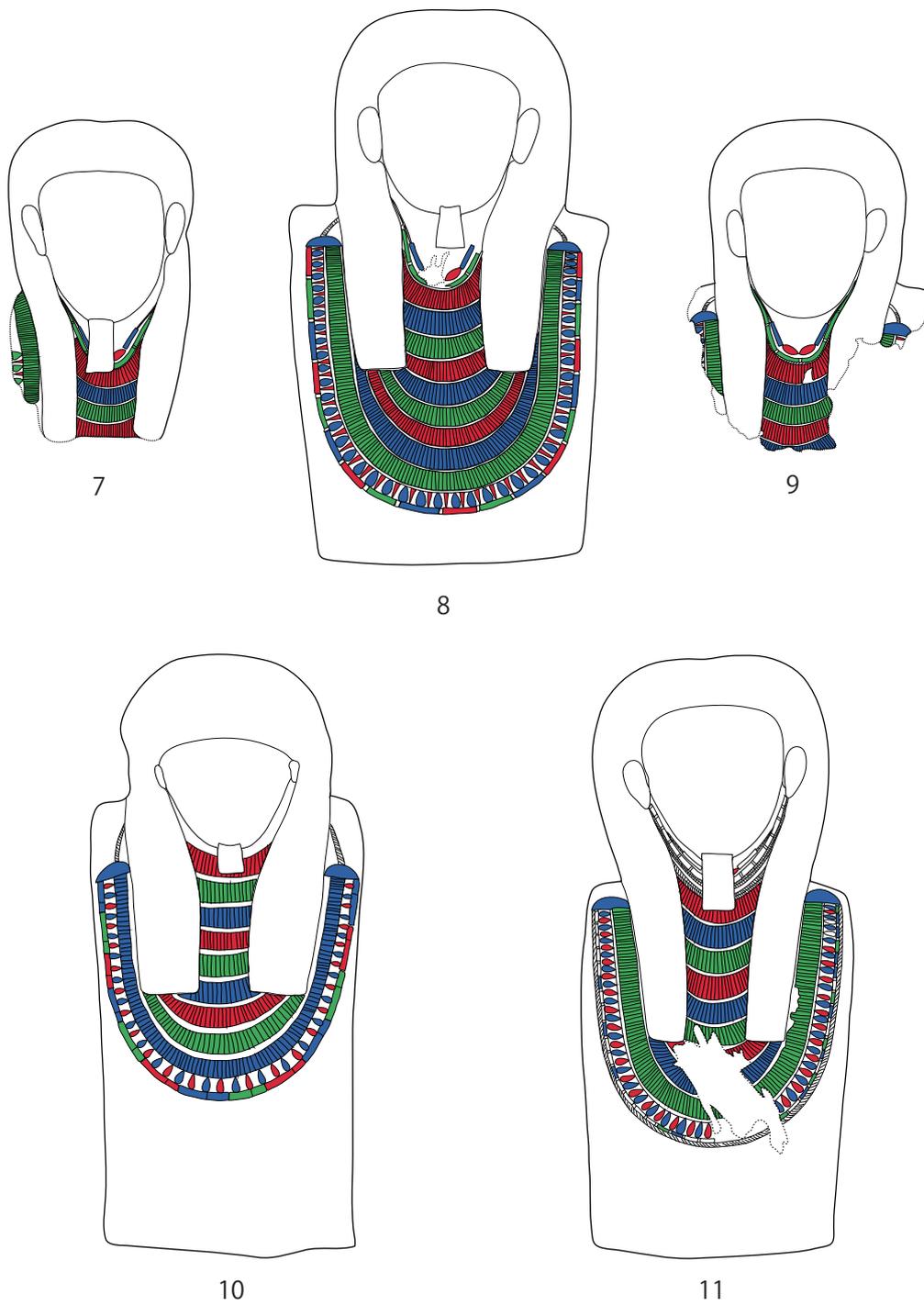


図4 タイプ2のマスクにおける装身具の表現  
 (表2における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
 Fig.4 Type 2

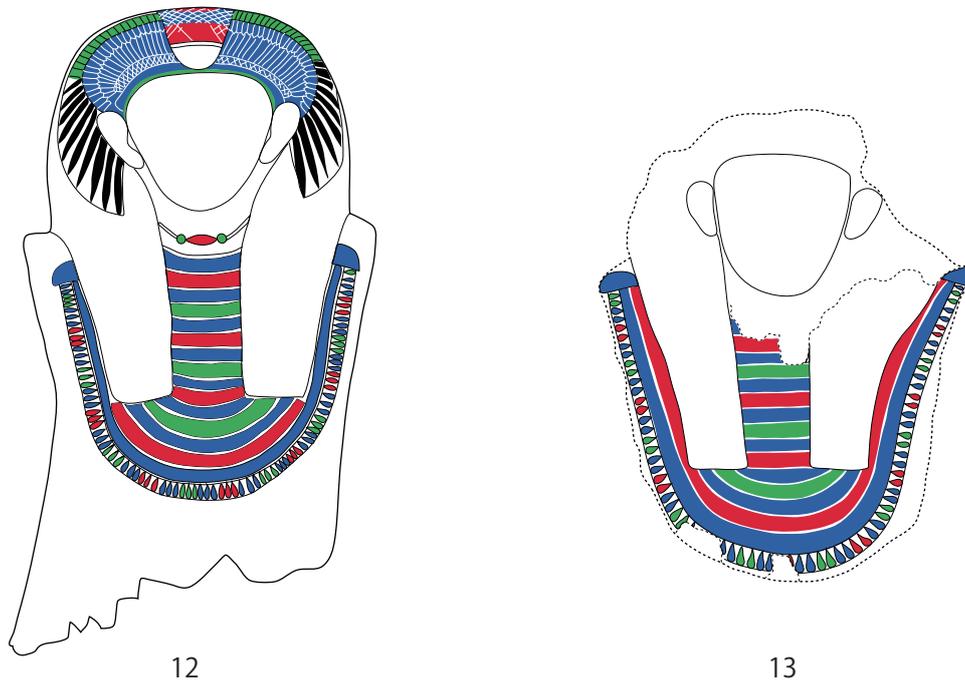


図 5. タイプ 3 のマスクにおける装身具の表現  
 (表 2 における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
 Fig.5 Type 3

#### 4-3. 人形木棺

人形木棺は、マスクが発展したものであると指摘されており、その本格的な利用は中王国時代後半から始まる。また、中王国時代の人形木棺は木製よりもカルトナージュ製が一般的であった。そして、当該期にはまだ箱形木棺の中に入れて利用された (Andrews 1984: 52-53)。

人形木棺に表現された装身具には、髪飾り (鬘飾り)、セウレットビーズ、襟飾り、「下エジプト王様式の衣装」を構成するビーズ製エプロンが挙げられる (表 3)。マスクと同様襟飾りは 9 点の対象資料全てに描かれていた (図 6)<sup>4)</sup>。そして、資料番号 1, 3, 4 の人形木棺には、マスクの分類におけるタイプ 2・タイプ 3 と同様で赤・青・緑色によって彩色が施されている。これらは彩色のパターンからタイプ 3 のマスクとの類似性が高い。また、セウレットビーズが描かれた人形木棺を見ると、資料番号 2 を除いて赤色樽形ビーズの両端に緑色球形ビーズが配置された形態で、やはりタイプ 3 と共通している。タイプ 3 のマスクは中王国時代後半に年代付けられ、人形木棺が利用された時期と同時期である。したがって、両者の一部は共通する様式のもと装飾が施されたと考えられる。しかし、人形木棺の中には彩色ではなく象嵌によって装身具が表現されたものがあり、一方では多様な表現方法が採られていたことが分かる。

襟飾りとセウレットビーズを除くと、一部の人形木棺には「下エジプト王様式の衣装」が描かれた (図 7)。対象資料中には 2 点含まれ (資料番号 1, 4)、実際の装着部位である腰部にビーズ製エプロンが描かれている。また、人形木棺には、髪飾り (鬘飾り) の表現も見られる (図 7)。ただし、これは塗料による描写ではなく、

多数のビーズが頭部に接着されて表現されている。対象資料中には2点(資料番号1, 5)の人形木棺の頭部にこのようなビーズが観察され、どちらも同じ形態のビーズであった。また、他の墓地遺跡からも同様の形態をしたビーズが出土しており(Engelbach 1923: pl.51)、複数遺跡で共通する装飾であったことが窺える。

表3 本稿で対象とした人形木棺の詳細(筆者作成)  
Pl.3 List of anthropoid coffins analyzed in this paper

資料番号	出土地	墓番号/被葬者名	時期	髪飾り (鬘飾り)	表現された装身具			備考	参考文献・資料
					髷飾り	セウエレット ビーズ	「下エジプト王様式の 衣裳」		
1	ダハシユール北	Shaft 65/ セベクハト	12王朝後半	+	+	+	-	Baba and Yoshimura 2010, p.11	
2	リシエト北	pit 763/ セネブティン	アメンエムハト 3世	-	+	-	装身具は象嵌で表現されて いる。髷飾りの下に表現され た装身具の種類は 不明。	Mace and Winlock 1916, pl.XX; Metropolitan Museum of Art 08.200.44	
3	ベニ・ハサン	tomb 132/ ウセルハト	セウセレット 3世	-	+	-	?	Fitzwilliam Museum E.88.1903	
4	デル・エル= ベルンヤ	tomb 14/セビ	12王朝	-	+	+	頭部にはネメス頭巾の表現 あり。髷飾りの配色とセウエ レットビーズ(赤色樽形の面端 に緑色球形)は写真では確 認出来なかったがLacau 1904: 198に文章としての 記述あり。	Lacau 1904 (JE 32668 = CG 28084)	
5	マイル	-/ハピアンケトファイ	12王朝中頃	+	-	-	-	Metropolitan Museum of Art 12.183.11c	
6	マイル	-/ネフティス	12王朝	-	+	-	装身具は象嵌で表現 されている	Metropolitan Museum of Art 11.150.15b	
7	リファ	tomb 331/ クヌムヘテブ	セウセレット 3世	-	+	-	-	Petrie 1907, pl.XI; National Museums of Scotland A.1907.713.5	
8	リファ	tomb II/ ネケトアンク	中王国後半	-	+	-	頭部にネメス頭巾の表現、 人型木棺全体にビーズ ネットの表現あり。	Manchester Museum 4739; David 2007	
9	リファ	tomb II/ クヌムネケト	中王国後半	-	+	-	頭部にネメス頭巾の表現、 人型木棺全体にビーズネット の表現あり。ターミナル(ハ ヤブサ頭形)は写真では確 認出来なかったが、David 2007: 52に文章としての記述 あり。	Manchester Museum 4740; David 2007	

+=描写あり、-=描写なし、?=不明

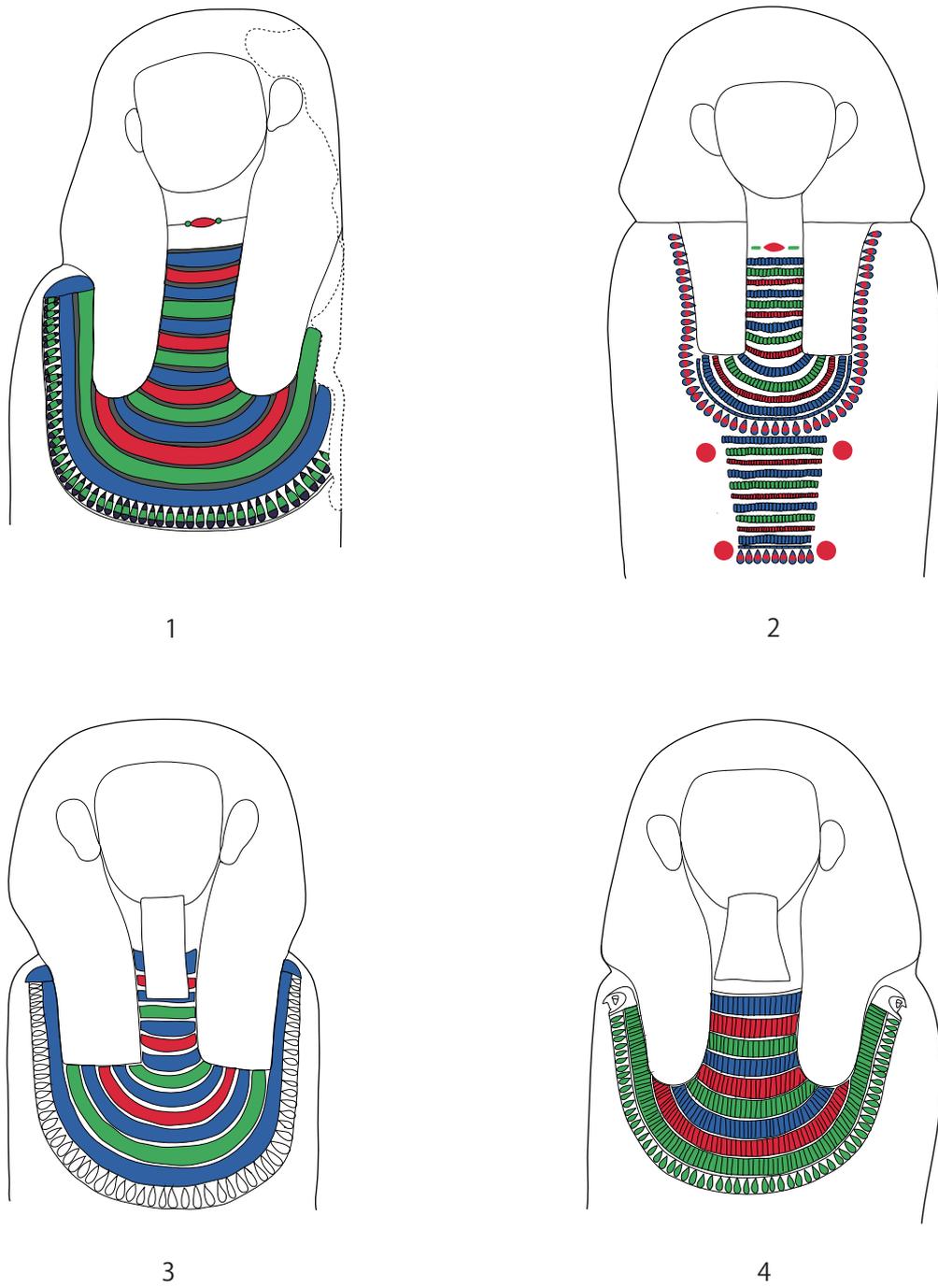


図6-1 本稿で対象とした人形木棺の胸部における装飾  
(表3における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
Fig.6-1 Upper parts of anthropoid coffins analyzed in this paper

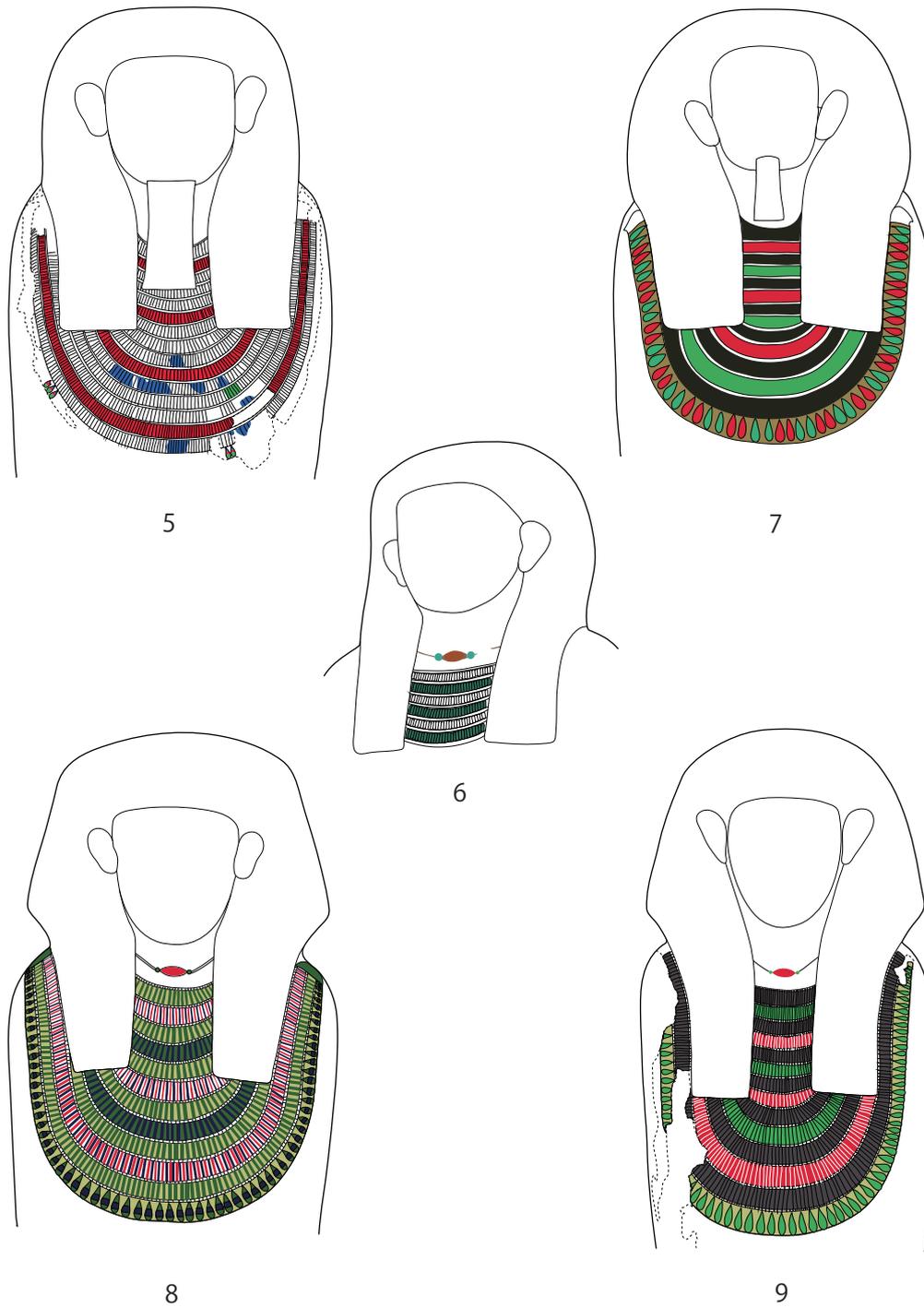


図 6-2 本稿で対象とした人形木棺の胸部における装飾  
 (表 3 における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
 Fig.6-2 Upper parts of anthropoid coffins analyzed in this paper



図7 髪飾り（鬘飾り）と「下エジプト王様式の衣装」のビーズ製エプロンが表現された人形木棺（資料番号1）  
 (Baba and Yoshimura 2010, p.11、一部加筆)

Fig.7 Hair ornaments and bead apron represented in the anthropoid coffin

#### 4.4. 女性小像

ここでは、木製とファイアンス製の女性小像に表現された装身具をまとめる。

##### a. “Paddle dolls”

まず、“Paddle doll”と呼ばれる女性の小像について見ていきたい。“Paddle doll”とは、木製の薄い板で女性を象った副葬品である（図8）。黒色や赤色の塗料で装飾が施されたが、脚が表現されることはなかった。出土地には偏りがあり、テーベ（Thebes）を中心とした南部エジプト地域に集中している（Morris 2011: 74-75; Tooley 1989: 311）。また、出土した墓の年代は第11王朝や第12王朝初頭が主で、中王国時代後半に年代付けられるものは極めて少ない（Tooley 1989: 313-314）。“Paddle doll”については、これまで多産や安産など女性と関係する呪術的な意味合いがあったと指摘されているほか、踊り子を模した像であるとも言われている（Morris 2011; Tooley 1989: 311）。モリス（Morris, E. F.）は、“Paddle doll”やファイアンス製女性小像は多産性や豊穡と関係する器物というよりも、まさに現世と同様の役割を持つ踊り子として副葬され、女神と死者を仲介し、死者の魂のために永遠に踊り続けたのだと主張している（Morris 2011）。このように、“Paddle doll”の持つ役割に関しては複数の説が挙げられるが、いずれにせよ葬送儀礼や来世において必要不可欠なものということではなかったと捉えられる。本稿では、“Paddle doll”を女性としての性質を強調した特に現世と関連するものとして位置付けたい。

装飾が観察できる22点の“Paddle doll”を対象に分析をおこなうと、一連首飾り、襟飾り、腕輪、ボディチェーン<sup>5)</sup>が描かれていることが判明した（表4）。これらの中で最も頻繁に描かれたのは襟飾りで、13点に見られた。しかし、描き方は多様で高い統一性はない。また、裏面が報告されている資料を見てみると、襟飾りの鍬は描かれておらず、単に首の後ろで束ねて装着されている。一連首飾りは3点でのみ観察できたが、護符がペンダントとして描かれていたりとはやはり統一性は見られない。腕輪に関しては、一連腕輪か幅広腕輪であるかを判断するのは難しいが、上腕に装着するアームレット（armlet）として描かれたものが観察できる。ボディチェーンは、前面か背面、あるいは両面に交差したラインで表現された。以上の装身具に加え、タトゥーあるいはペイントを表していると考えられる装飾も観察できる。これらは10点の“Paddle doll”に表現されており、菱形模様のほかタウレット神や鳥を模したものがしばしば描かれている。菱形や鳥を象ったタトゥーは実際の遺体においても検出されており、“Paddle doll”に施された装飾との類似性が高い（Morris 2011: 80-82）。また、20点の“Paddle doll”に着衣の表現が施されていた。中には前面のみに衣服が描かれ、背面にはボディチェーンが表現されているものがあり、エプロンのような衣服を装着していた様子を表していると考えられる。

表4 本稿で対象とした“Paddle doll”の詳細(筆者作成)

Pl.4 List of “Paddle dolls” analyzed in this paper

資料 番号	出土地	墓番号	時期	表現された装身具				タトゥー/ ペイント	備考	参考文献・資料
				一連首飾り	襟飾り	腕輪	ボディ チェーン			
1	テーベ (Sheikh Farag)	S.F. 8	11王朝	-	+	-	?	?	着衣表現あり	Museum of Fine Arts Boston 13.3567
2	テーベ (Sheikh Farag)	S.F. 12	11王朝	-	+	?	?	?	着衣表現あり	Museum of Fine Arts Boston 13.3603
3	アル=アサシーフ (ディール・アル= バハリ)	tomb 816	11王朝	-	+	-	+	+	着衣表現あり	Metropolitan Museum of Art 31.3.35a, b
4	アル=アサシーフ (ディール・アル= バハリ)	tomb 816	11王朝	+	-	-	?	+	着衣表現あり。一連首飾りには複数の護符が描写されている。	Metropolitan Museum of Art 31.3.37a, b
5	アル=アサシーフ (ディール・アル= バハリ)	tomb 816	11王朝	-	-	-	+	?	着衣表現あり	Metropolitan Museum of Art 31.3.36a, b
6	アル=アサシーフ (ディール・アル= バハリ)	tomb 816	11王朝	-	+	-	?	+	着衣表現あり	JE 56274; Morris 2011, fig.3
7	アル=アサシーフ	tomb 813	11王朝	-	+	?	+	-	着衣表現あり	Metropolitan Museum of Art 31.3.38
8	アル=アサシーフ	tomb 818	11王朝	-	+	-	-	+	着衣表現あり。 鳥のタトゥー	Metropolitan Museum of Art 31.3.43
9	アル=アサシーフ	tomb 839	11王朝	+	?	?	+	?	着衣表現あり	Metropolitan Museum of Art 31.3.45
10	アル=コーカ	tomb 828	11王朝	-	+	+	?	?	着衣表現あり	Metropolitan Museum of Art 15.10.90
11	-	-	中王国前半 (又は第1中間期)	-	+	-	?	?	着衣表現あり	British Museum EA 6459
12	-	-	中王国	-	+	+	+	+	着衣表現あり。タウレット神のタトゥーあるいはペイント	Brooklyn Museum 37.100
13	-	-	中王国	-	+	+	+	+	着衣表現あり。タウレット神と犬/ジャッカル <small>の</small> タトゥーあるいはペイント	Brooklyn Museum 37.101
14	-	-	中王国	-	-	-	+	+	タウレット神とワニのタトゥーあるいはペイント	Brooklyn Museum 37.102
15	-	-	中王国	+	-	-	-	-	着衣表現あり。一連首飾りには1点の護符が描写されている。	Brooklyn Museum 37.104
16	-	-	中王国	-	+	?	+	+	着衣表現あり。鳥かタウレット神のタトゥーあるいはペイント	Brooklyn Museum 37.105
17	-	-	中王国	+	+	+	+	+	着衣表現あり。赤色の悪魔(demon)のタトゥーあるいはペイント	Brooklyn Museum 16.84
18	-	-	中王国	?	?	+	+	?	着衣表現あり	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.380
19	-	-	中王国	?	?	+	?	?	着衣表現あり	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.381
20	-	-	中王国	-	+	-	?	?	着衣表現あり	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.382
21	-	-	-	+	-	(+)	?	?	着衣表現あり	Museum of Fine Arts Boston 72.4287
22	-	-	-	-	+	-	+	+	タウレット神のタトゥーあるいはペイント	Museum of Fine Arts Boston 13.5100

+ = 描写あり, - = 描写なし, ? = 不明, (+) = 明瞭ではないがおそらく描写あり, ※一連首飾りか襟飾りか判断できない場合は両項目に跨いで+を表示

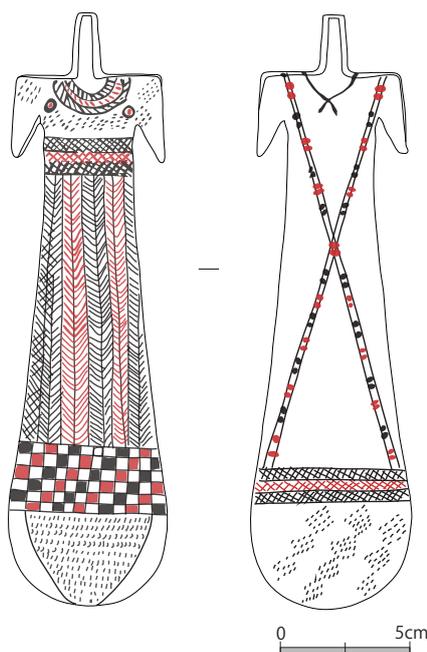


図8 中王国時代の墓から出土した“Paddle doll”  
 (Metropolitan Museum of Art 31.3.35a, b 掲載写真をもとに筆者作成)  
 Fig.8 “Paddle doll” from the Middle Kingdom

b. ファイアンス製女性小像 (Truncated Middle Kingdom female figurines, Fertility figurines)

最後に、ファイアンス製女性小像について見ていく。ここでは、トゥーリー (Tooley, A. M. J.) の言うタイプ IIIa (Tooley 1989: 321-322)、ピンチ (Pinch, G.) の言うタイプ 1 (Pinch 1993: 198-199) に該当する脚が表現されていないファイアンス製の女性小像を対象とする。まず、出土地は“Paddle doll”と同じくテーベから多く出土しているほか、メンフィス・ファイユーム地域のリシェト (Lisht) 遺跡から多数確認されている。出土墓の中に第 11 王朝に年代付けられるものはなく (Tooley 1989: 326)、第 12 王朝あるいは第 13 王朝の墓から出土している。また、墓地ではなく「カフーン (Kahun)」の居住址から出土したと言われるものもある (Petrie 1927: 59)。ファイアンス製女性小像については、やはり多産や安産といった呪術的な意味合いを持つと言われるほか、“Paddle doll”との共通点が多いことから同様の役割を担っていたと指摘されている (Morris 2011)。したがって、本稿においても、ファイアンス製女性小像は“Paddle doll”と同様に、女性としての性質を強調した現世に関連するものとして捉える。

本稿では、18 点の青色・水色ファイアンス製女性小像を対象に分析をおこなった (図 9、表 5)。その結果、一連首飾り、二枚貝形護符付き一連首飾り、子安貝形護符付き腰飾り、一連腕輪、幅広腕輪、ボディチェーンの表現が観察できた。中でも子安貝形護符付き腰飾りが最も頻繁に表現され、半数以上である 12 点に描かれている。一連首飾りは、樽形ビーズの表現が見られる資料番号 3 を除くと球形ビーズの連なりが表現されていた。二枚貝形護符付き一連首飾りは、いずれも大きな二枚貝形護符をペンダントとして装着しているように描かれている。一連腕輪は、アームレットとして上腕に描かれている例が見受けられる。また、幅広腕輪にはスパーサービーズの表現がしばしば見られる。ボディチェーンは、全て胸から腹にかけてビーズの連なりが交差した状態で表現されている。以上のように、各装身具の表現方法には、一部を除いて高い統一性があったと言える。また、タトゥーの表現が太腿部分に集中して見られ、菱形模様が大半を占めている。一方、着衣の表現は 4 点のみに施されていた。

表5 本稿で対象としたファイアンス製女性小像の詳細 (筆者作成)  
 Pl.5 List of truncated Middle Kingdom female figurines analyzed in this paper

資料番号	出土地	墓番号/被葬者名	時期	表現された装身具				備考	参考文献・資料	
				一連首飾り	二枚貝形護符付き一連首飾り	子安貝形護符付き一連首飾り	腰飾り			
1	リシエト南	pit. 3/ ヘド	12王朝前半	+	-	-	-	+	着衣表現あり	Lansing and Hayes 1934, fig.29 (A)
2	リシエト南	pit. 3/ ヘド	12王朝前半	+	-	+	-	+	-	Lansing and Hayes 1934, fig.29 (B)
3	リシエト南	pit. 3/ ヘド	12王朝前半	+	?	-	?	-	着衣表現あり	Lansing and Hayes 1934, fig.29 (C); Metropolitan Museum of Art 34.1.125
4	リシエト南	pit. 3/ ヘド	12王朝前半	+	-	-	+	-	着衣表現あり	Lansing and Hayes 1934, fig.29 (D)
5	リシエト北	pit. 782/-	12王朝後半~13王朝前半	-	+	+	?	+	-	Metropolitan Museum of Art 08.200.18
6	リシエト北	pit. 885/-	13王朝中頃	?	?	?	?	+	状態悪	Metropolitan Museum of Art 22.1.180
7	リシエト	-	-	+	-	-	+	-	着衣表現あり	Morris 2011, fig.8
8	ラフーン	-	12王朝	(+)	-	(+)	-	+	-	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.390
9	「カフーン」の住居址	-	12王朝	?	?	-	-	+	下部のみ残存	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.391
10	「カフーン」の住居址	-	12王朝	?	?	+	+	+	下部のみ残存	Petrie 1974 (1927), p.59, fig.391
11	ヘリオポリス?	-	中王国	?	?	?	?	?	状態悪	Fitzwilliam Museum E.191.1939
12	アル=アサシーフ (ティール=アル=ハハリ)	TT316/ネフェルヘテブ	12王朝	+	+	+	?	+	-	Winlock 1923, p.22, fig.15; Cairo JE 47710
13	テヘベ	tomb 5/-	13王朝	?	?	(+)	?	?	状態悪、腰飾りはドットのみで表現されている	Manchester Museum 1787
14	アル=アサシーフ	tomb 809/-	中王国~新王国	?	?	+	?	+	写真未確認	Morris 2011, p.79; Metropolitan Museum of Art 14.1.416
15	アル=アサシーフ	tomb 828/-	中王国~新王国	?	?	+	?	+	写真未確認	Morris 2011, p.79; Metropolitan Museum of Art 15.10.93
16	テヘベ西岸	-	中王国	-	+	+	?	+	-	British Museum EA52863
17	-	-	中王国	-	+	+	+	+	-	Louvre Museum E10842
18	-	-	中王国	-	+	+	+	+	-	Agyptisches Museum, Berlin inv. no. 9883; Robins 1993, fig.17a

+ = 描写あり, - = 描写なし, ? = 不明, (+) = 明瞭ではないがなおそらく描写あり, ※ = 一連首飾りか二枚貝形護符付き一連首飾りか判断できない場合は両項目に跨いで+を表示

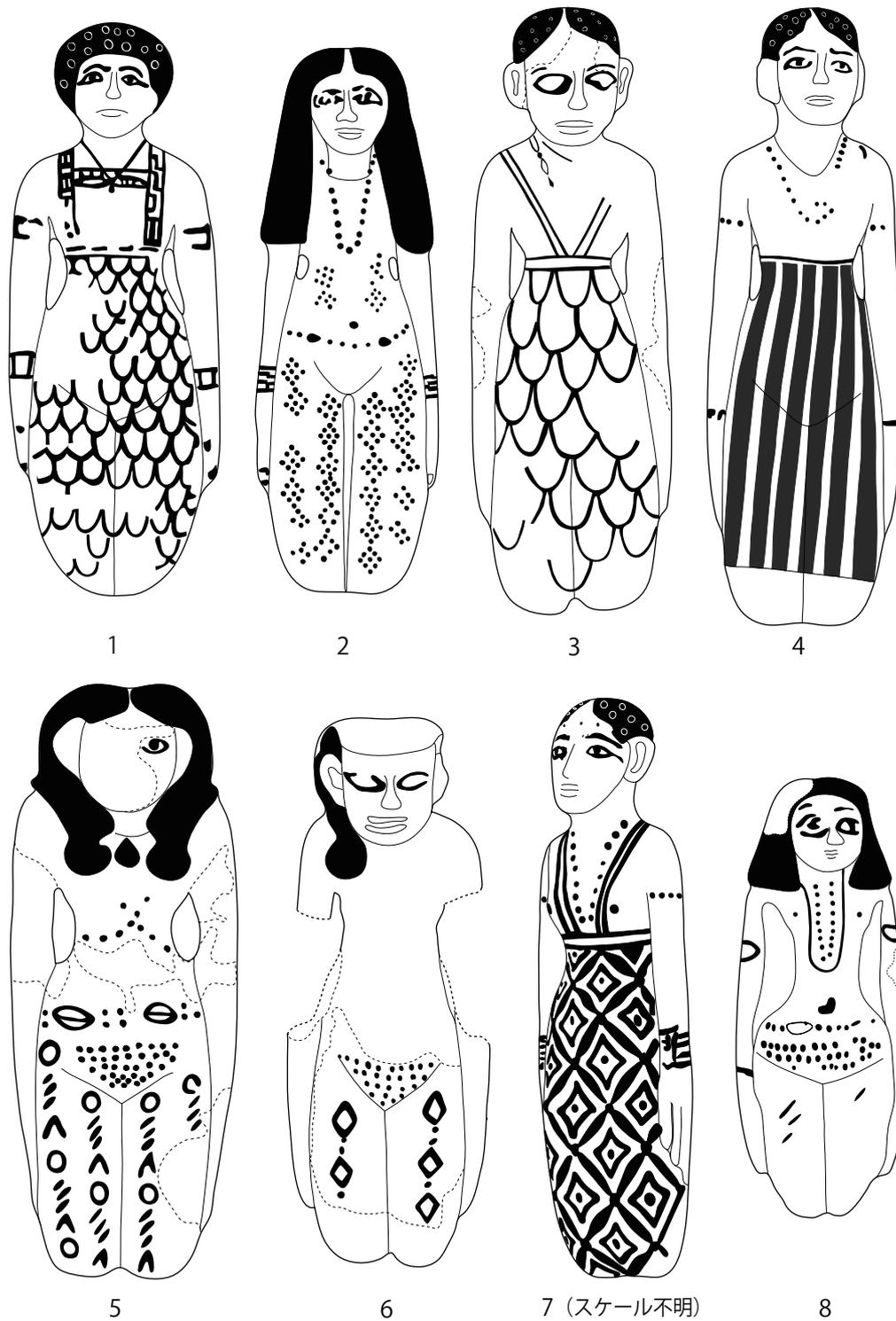


図9-1 本稿で対象としたファイアンス製女性小像  
 (表5における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
 Fig.9-1 Truncated Middle Kingdom female figurines analyzed in this paper

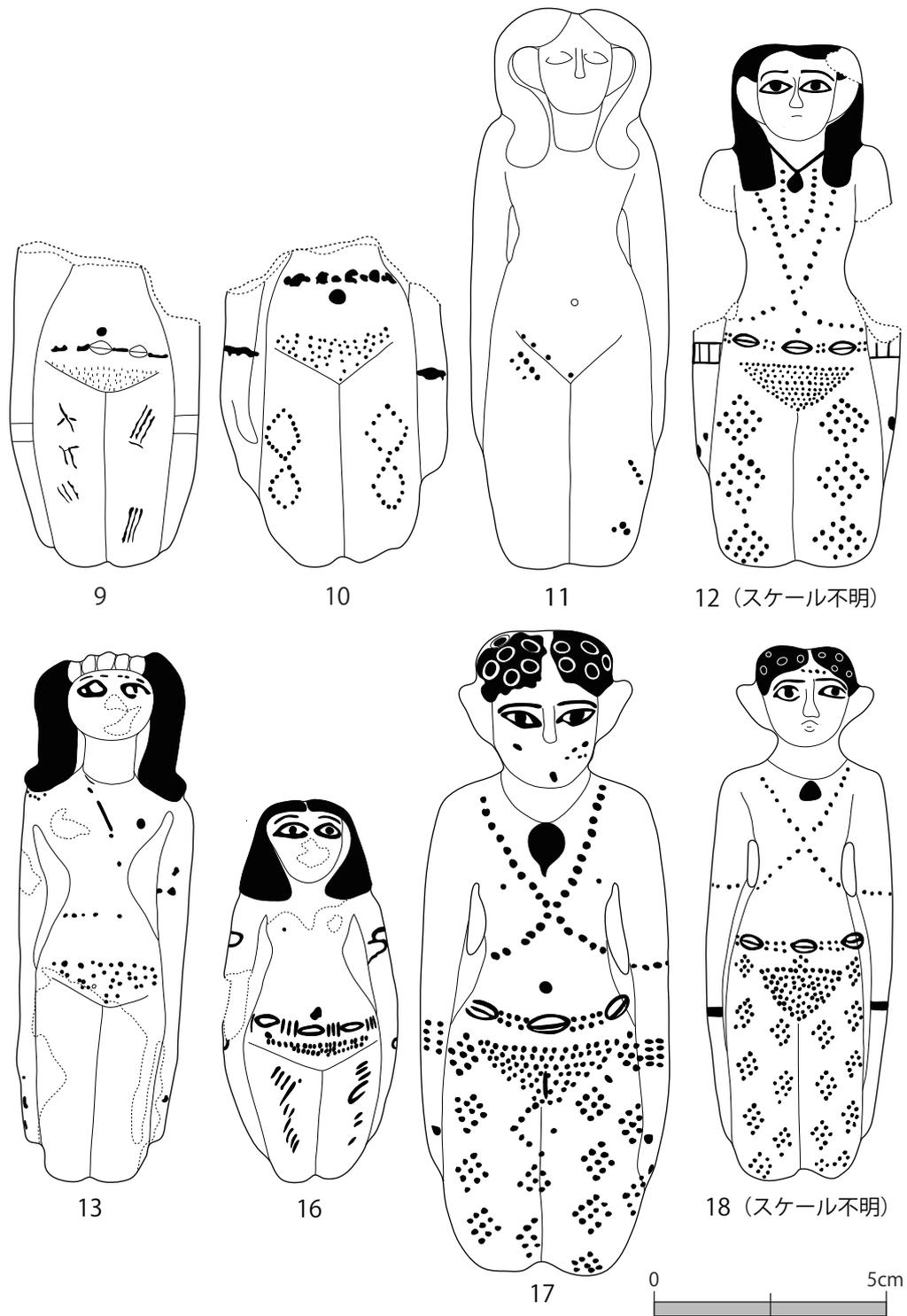


図9-2 本稿で対象としたファイアンス製女性小像  
 (表5における各資料番号の参考文献・資料にある写真等をもとに筆者作成)  
 Fig.9-2 Truncated Middle Kingdom female figurines analyzed in this paper

4-5. 装身具が描かれた図像資料の考察

これまで、オブジェクト・フリーズ、マスク、人形木棺、女性小像に描かれた装身具について整理してきた。ここでは、それら図像資料を比較し、各装身具が担った役割について考える。

表6 各媒体に描かれた装身具の比較 (筆者作成)  
Pl.6 Personal adornments represented in each object

	オブジェクト・フリーズ	マスク	人形木棺	“Paddle doll”	ファイアンス製女性小像
環状頭飾り	+	+	-	-	-
髪飾り(鬘飾り)	-	-	+	-	-
襟飾り	+	+	+	+	-
襟飾り用錘	+	(+)	?	-	-
メナト首飾り	+	-	-	-	-
セウレットビーズ	+	+	+	-	-
ウアジュビーズ	+	+	-	-	-
一連首飾り	+	-	-	+	+
二枚貝形護符付き一連首飾り	+	-	-	-	+
一連腕輪	+	(-)	(-)	-	+
幅広腕輪	+	(-)	(-)	-	-
幅狭腕輪	+	(-)	(-)	+	+
金属腕輪あるいは足輪	+	(-)	(-)	-	-
子安貝形護符付き腰飾り	-	(-)	-	-	+
一連足輪	+	(-)	(-)	(-)	(-)
幅広足輪	+	(-)	(-)	(-)	(-)
幅狭足輪	+	(-)	(-)	(-)	(-)
「下エジプト王様式の衣装」	+	(-)	+	-	-
ボディチェーン	-	(-)	-	+	+
その他護符	+	-	-	+	-

+=描写あり, -=描写なし, (-)=もとから描く場所なし, (+)=存在を示唆する物の描写あり, ?=不明  
※装身具の種類が明確でない場合は複数項目に跨いで+を表示

まず、各媒体に描かれた装身具の種類を示した表6を見ると、全ての媒体に共通して描かれた装身具は無かったことが分かる。しかしながら、マスクと人形木棺に描かれた装身具は類似しており、襟飾りとセウレットビーズが主要な装身具として表現された。また、“Paddle doll”とファイアンス製女性小像の装身具も類似しており、一連首飾り、腕輪、ボディチェーンが共通して描かれた。両者の類似性は Morris 2011 や Pinch 1993 においても指摘されており、本稿の分析からもそれが追認できたと言える。そして、オブジェクト・フリーズに示された装身具の種類は最も多く、マスク、人形木棺、女性小像に描かれた装身具の大半が含まれる。

しかし、女性小像にはオブジェクト・フリーズに表現されない装身具が少数ながら描かれた。それらには、子安貝形護符付き腰飾りとボディチェーンが該当する。本稿で対象とした女性小像は、死者ではなく現世の女性を表していると考えられるため、これらに描かれた装身具の第一の役割は副葬品ではなかったと推測できる。これらの装身具は、実際は女性を守る護符としての意味を帯びたほか、女性性を表示するための役割も担っていたのではないだろうか<sup>6)</sup>。つまり、被葬者を守るために副葬品として利用される場合はあったとしても、本来の役割は現世の女性と深く結びつくということである。ただし、先述の通り対象とした女性小像は踊り子を模している可能性が考えられるため、そこに描かれた装身具が広く一般の女性にも日常的に装

着されていたとは言い切れない。オブジェクト・フリーズは、葬送用品の木棺に描かれた図像であり、上述の通り死後に必要とされる物を示した可能性が指摘されている。また、オブジェクト・フリーズには武器や化粧道具が被葬者の性別に左右されることなく描かれた (Willemms 1988: 50-51)。したがってそこには、性別関係なく葬送儀礼や理想的な来世において必要なものが示されたと考えられる。子安貝形護符付き腰飾りやボディチェーンが描かれなかったのは、これらが偏に女性に属する装身具であり、葬送儀礼やオシリス神との同一化といった事項との関連性が薄かったからであると捉えられるのである。女性小像の中で“Paddle doll”には襟飾りも描かれたが、ターミナル<sup>7)</sup>や錘は表現されておらず、オブジェクト・フリーズ、マスク、人形木棺に描かれた襟飾りとは種類を異にすると言える。チョーカーのような装身具であった可能性も考えられる。

他方、女性小像にのみ描かれなかった装身具の一つにセウエレットビーズが挙げられる。マスクと人形木棺には首飾りとして描かれたほか、オブジェクト・フリーズにも示された。木棺、マスクといった葬送用品としての性格を強く帯びた器物に特化して描かれたことから、セウエレットビーズは葬送儀礼と密接に関係する装身具であったと考えられる。つまり、現世の人々が装着するためのものではなく、死者に副葬するかあるいは図像として描くべき装身具として捉えられていたということである。「セウエレット」はヒエログリフの *swr* 「飲む」との関連性が推測され、死者が飲食できるようにとの意味が込められていたと考えられる (Grajetzki 2014: 27)。マスクや人形木棺の喉部分に短い首飾りとして表現された点も死者と飲食との関連付けを窺わせる。そして、これはセウエレットビーズが日常生活ではなく葬送の際に必要なとされた装身具であることを示す傍証となろう。前述の通り、マスクに描かれた一連首飾りには表現方法に高い統一性が看取された。そして、それがセウエレットビーズとウアジュビーズを組み合わせた形態であったことは、マスクに描かれた一連首飾りも葬送儀礼と関連する装身具として認識されていたことを示唆している。また、ターミナルが付属した襟飾りは、マスクと人形木棺に必ず描かれる装身具であった。オブジェクト・フリーズにおいても、他の装身具と比較すると高頻度で描かれた。したがって、襟飾りも葬送儀礼と密接に関係する装身具であったのではないだろうか。

表6を見ると、一連首飾り、二枚貝形護符付き一連首飾り、腕輪はオブジェクト・フリーズと女性小像に描かれた。葬送用品としての性格が強い木棺と現世との関係が深い女性小像の双方に描かれたことから、これら装身具は葬送儀礼と現世での生活の両方で利用されていたと推測できる。生前身に付けていたものを副葬する習慣があった可能性も考えられる。

## 5. 出土遺物と図像資料の比較

本章では、前章でまとめた図像資料と実際に出土した装身具との比較をおこない、装身具の種類における違い、実際の出土傾向と図像資料の分布状況の違いについて考える。

### 5-1. 装身具の種類

ここでは、出土資料には含まれるが本稿で扱った図像資料には見受けられない装身具について言及したい<sup>8)</sup>。山崎 2015 では、中王国時代に年代付けられる 18 遺跡 160 基の墓から出土した形状が判断可能な装身具を集成し、装身具の装着部位・形態を基準に分類した。その結果、「下エジプト王様式の衣装」<sup>9)</sup>を除いて 15 種類の装身具が確認された (表7)。この中で、「胸飾り (ペクトラル)」、「トルク」、「指輪」が本稿で対象とした図像資料には描かれていなかった。以下でその背景を考えたい。

表 7 中王国時代の墓から出土した装身具の種類 (筆者作成)  
Pl.7 Classification of personal adornments found from tombs dated the Middle Kingdom

装着部位	名称	詳細
頭	環状頭飾り	冠として装着する。
	髪飾り(鬘飾り)	ビーズの形状をしており髪あるいは鬘に通して装着する。
首・胸	襟飾り	半円形あるいはハヤブサ頭形ターミナルが付属し、ビーズを複数段連ねた肩から胸を覆う幅広い首飾り。金属板製もある。
	襟飾り用錘	襟飾りとともに首の後ろに装着し、前後のバランスを保つ。
	胸飾り(ペクトラル)	首飾りに付属する大型のペンダント。
	一連首飾り	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズが連なったタイプがある。護符がペンダントとして用いられたものもある。
	幅広首飾り(チョーカー)	ビーズを数段連ねた幅の広い首飾り。
	トルク	金属製の首飾りで、首に密着して装着する。
腕	幅広・幅狭腕輪	円筒形ビーズを複数段連ねて幅を作り出した腕輪。
	一連腕輪	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズが連なったタイプがある。護符がペンダントとして用いられたものもある。
	金属腕輪	金属板を湾曲させて装着するものとワイヤ状のものがある。
指	指輪	スカラベ形護符が頻繁に用いられている。
腰	ビーズ製腰飾り	同形状のビーズが秩序よく連なったタイプと、多様な形状のビーズが連なったタイプがある。護符が織り込まれているものもある。
脚	幅広・幅狭足輪	円筒形ビーズを複数段連ねて幅を作り出した足輪。
	一連足輪	同形状のビーズが連なった足輪で、護符がペンダントとして用いられたものもある。

まず、オブジェクト・フリーズ、マスク、人形木棺に描かれなかった理由として、上記3種類の装身具が葬送において必須とされるものではなかった可能性が挙げられる。胸飾りに関しては、王女に属したものは全て木棺外の木箱から出土しており、副葬を目的として製作されたものではなかったと推測できる<sup>10)</sup>。また、これらには王名が施されていることから、王との繋がりを誇示していると指摘されている (Grajetzki 2014: 122)。胸飾りは、葬送儀礼に必要な装身具というよりも、生前の被葬者の社会的地位を示す役割を担って副葬されたのではないだろうか。次に、トルクは古代エジプトでは非常に珍しい装身具であり (Andrews 1990: 117)、パングレーブ (Pan-Grave) 文化の墓からの出土例がある (Souza 2013: fig.4)。そして、指輪は中王国時代にはまだ一般的ではなく、発展段階にある比較的新しい装身具であった (Aldred 1971: 44)。このような外国由来の装身具や新しく利用され始めた装身具は、中王国時代以前からの伝統を引き継ぎ成立している葬送儀礼との関連性は薄かったと考えられる。実際に副葬される装身具には、一般的な葬送儀礼の規範に必要なものだけでなく、被葬者あるいは被葬者が属した社会集団の指向を反映したものも含まれたのであろう。一方、葬送用品である木棺やマスクには、葬送儀礼において必要なものが優先的に描かれたのである。

胸飾り、トルク、指輪が女性小像に描かれなかったのは、上述の通り現世においてもそれほど普及した装身具ではなく、また女性を守るといった役割も特に担っていなかったからであると考えられる。胸飾りに関しては、王名が施されている点と主に王族に副葬された点から、社会的地位の高い者に属した装身具であったと言える。女性小像は王族の女性を模したものではないため、胸飾りは描かれなかったのであろう。

## 5-2. 実際の出土傾向と図像資料の分布

前章の分析から、図像としては襟飾りが最も頻繁に描かれる装身具であることが判明した。しかし、襟飾りの実際の出土頻度は非常に低く、図像資料の分布と実際の副葬品との間には明らかに大きな乖離があった (山崎 2016)。さらに、襟飾りの出土傾向には地域性があったことが判明している (山崎 2015)。メンフィス・ファイユーム地域から多数出土する一方、南部エジプト地域からはほとんど出土墓が確認されなかったため

ある<sup>11)</sup>。しかしながら、画像資料の分布状況を見てみると、襟飾りが描かれたマスク、人形木棺、“Paddle doll”)はエジプト全土から出土している。逆に、画像資料に見られる地域・時期性と実際の出土資料を比較してみても、やはり必ずしも一致しない。本稿の分析により、マスクには地域や時期によって異なる表現方法で装身具が描かれていたことが判明した。しかし、中王国時代前半の中部エジプト地域出土のマスクにのみ描かれた環状頭飾りは、実際には中王国時代の他地域・時期の遺跡からも出土している (e.g. Mace and Winlock 1916)<sup>12)</sup>。また、マスクに描かれた襟飾りのデザインやビーズの形態にも違いが看取されたが、実際にはこのような変化は表れないのである (山崎 2016)。

以上より、中王国時代には実際に副葬する装身具を単に模して描いたわけではなかったことが分かる。実際にその物を手に入れるよりも画像として描く方が容易であったために、理想的な形態の装身具を画像に表す方法が採られたのではないだろうか。もし仮にそうであるならば、襟飾りはメンフィス・ファイユーム地域だけではなく、どの地域においても葬送儀礼に必須な装身具であり、また多彩色で構成されているものが理想的であったと考えられる。また、中王国時代前半の中部エジプト地域出土のマスクには、他地域・時期のものとは大きく異なる表現方法で装身具が描かれた。これは、当該地域・時期において他集団との差異を表示することが重要視されたことを示唆する。中王国時代前半は中央集権が強化される以前であり、中部エジプト地域には有力者が存在した。彼らは、葬送儀礼において他集団と異なる様式を取り入れ、それを画像として示すことで自らの特別性を再生産していたと考えられるのである。環状頭飾りや多装飾の襟飾りは、中王国時代前半の中部エジプト地域における葬送儀礼に必要な装身具であり、それらの画像表現は彼らのアイデンティティを強化する役割も担っていたのではないだろうか。つまり、実際にそのような装身具を製作・副葬できなくとも、画像表現で代替したということである。

画像表現による代替は他にも見られる。たとえば、実際には王族の墓からのみ出土する「下エジプト王様式の衣装」や準貴石が多用された多彩色の襟飾りが画像としては王族以外のマスク・木棺に描かれた。すなわち、理想的な装身具を実際の副葬品として所持できるか否かは、被葬者が属した地域・社会集団によってある程度の制限があったため、王族以外の人々は画像として代替したと考えられるのである。

## 6. おわりに

本稿では、画像資料の分析から中王国時代に利用された装身具の役割について考察した。その結果、画像資料によって表現される装身具の種類に違いがあり、それは画像が描かれた媒体の性質に左右されることが分かった。そして、葬送用品としての性格が強い木棺・マスクに描かれた襟飾りやセウエレットビーズは葬送儀礼において重要な装身具であった一方、現世の女性を模している女性小像にのみ描かれた子安貝形護符付き腰飾りやボディチェーンは、女性を守るほか女性性を表示する役割が与えられた装身具であったと考えた。

さらに、画像資料と出土資料を比較すると多数の相違点が挙げられた。対象とした画像資料には含まれないものが実際には出土していたほか、実際の出土傾向と画像資料の分布状況は一致しなかったのである。また、中王国時代前半の中部エジプト地域出土のマスクには、実際よりも華やかな装飾が施された装身具が描かれていた。これらのことから、実際には製作・所持することが難しい装身具を画像として代替していたと考えた。そして、木棺やマスクは葬送儀礼と密接に関わる装身具を優先的に示したが、時には被葬者が属する集団の特別性を示すための媒体として利用された可能性を指摘した。

葬送用品である木棺、マスクと現世の女性を表した女性小像に描かれた大半の装身具は実際に墓から出土している。したがって、副葬品選択に際しては葬送儀礼と特に関係するものだけが選択されたわけではないと言える。実際の副葬品は、葬送儀礼に必要な装身具が重要視された一方で、ジェンダーや被葬者あるいは

被葬者が属した集団の指向、アイデンティティーを表すものなど様々な役割を担った装身具で構成されていたと考えられる。

図像資料から装身具利用を考えるにあたって、壁画資料は必須である。また、ステラや木製模型など本稿で対象としなかったものにも装身具は頻繁に描かれた。今後は、さらに図像資料の集成と分析を進め、中王国時代において各装身具がどのように捉えられ、利用されたのかを追究していきたい。

## 謝辞

早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授には日頃から多大なご指導を賜りました。査読を引き受けてくださった先生方からは、多岐にわたるご指摘・助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

## 註

- 1) 博物館所蔵資料については、実見、博物館ホームページ、博物館図録をもとにしている。
- 2) 図 3-5 はマスクに施された装飾のうち装身具を優先的に示している。すなわち、本来は髭の表現があったとしても、その下に装身具が描かれ、且つそれが写真で確認できる場合は、髭を省略して装身具だけを示すようにしている。ただし、髭があることによってその下に何が描かれているのか観察できない場合はそのまま髭の表現を残している。なお、本図は顔や鬘等の表現も省略している。また、色彩に関しては色見本等を用いているわけではなく、あくまで写真から読み取れる範囲での表現である。不鮮明な写真から何色であるか判断できない場合は彩色していない（白色になっている）。
- 3) 欠損や一部観察不可能な部分はあるものの、資料番号 7, 8, 11 には資料番号 9 のような一連首飾りが本来は描かれていたと推測される。
- 4) 本図は人形木棺に施された装飾のうち、胸部に表現された装身具のみを示している。髭の表現、色彩については註 2 を参照されたい。
- 5) ボディチェーンとは、ビーズの連なりから成る装身具で、胸部に交差して装着された (Grajetzki 2013)。ファイアンス製女性小像に描かれていることがグライエツキーによって指摘されている。
- 6) 子安貝形護符付き腰飾りについては、多産性や安産など女性と深く関係する護符としての役割があったことが先行研究でも指摘されている (Andrews 1994: 42)。
- 7) ターミナルとは、ビーズの束をまとめるために襟飾りの両端に付けられた半円形あるいはハヤブサ頭形の大型のビーズ (スパーサー) を指す。
- 8) 逆に、図像資料には見られるが出土資料には含まれない装身具には、ボディチェーンやマスクに描かれた一連首飾りが挙げられる。しかし、これらは出土時の状況が一つの要因として挙げられる。つまり、実際は利用されていたとしても、紐からビーズが外れた状態で出土するケースが多いため、認識されてこなかった可能性が考えられるのである。したがって、本稿ではこれらに関する考察は特に行わない。
- 9) ビーズ製エプロン、動物の尻尾、垂れ布、ツバメ形護符で構成される伝統的な王の衣装を指す (Patch 1995)。実物としてはビーズ製エプロン、動物の尻尾、ツバメ形護符の 3 種類が確認されている。
- 10) 中王国時代の装身具は、木棺内から出土する場合と、木棺外の本箱から出土する場合があるが、前者は副葬を目的として製作された装身具で、後者は生前の愛用品を副葬品に転用したものであると推測されている (Grajetzki 2014: 119)。
- 11) 完全形以外 (ターミナルや襟飾り用ビーズのみの出土) を含めて出土墓数を数えても、このような地域性が窺えた (山崎 2016)。
- 12) Mace and Winlock 1916 の刊行時には、セネブティシの埋葬は中王国時代前半と年代付けられていた。しかし、その後の研究によって中王国時代後半に年代付けられるようになり (Bourriau 1991: 17; Grajetzki 2014: 17-35)、現在広く受け入れられている。

## 参考文献

- Aldred, C.  
1971 *Jewels of the Pharaohs*, London.

- Andrews, C.  
 1984 *Egyptian Mummies*, London.  
 1990 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.  
 1994 *Amulets of Ancient Egypt*, London.
- D'Auria, S., P. Lacovara and C. H. Roehrig  
 1988 *Mummies and Magic: the Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston.
- Baba, M. and S. Yoshimura  
 2010 "Dahshur North : Intact Middle and New Kingdom Coffins", *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.
- Baines, J. and J. Malek  
 1996 *Atlas of Ancient Egypt*, New York.
- Bourriau, J.  
 1991 "Patterns of Change in Burial Customs During the Middle Kingdom", in Quirke, S. (ed.), *Middle Kingdom Studies*, New Malden, pp.3-20.
- Eggebrecht, A.  
 1993 *Pelizaues-Museum in Hildesheim: die Ägyptische Sammlung*, Mainz.
- Engelbach, R.  
 1923 *Harageh*, London.
- Firth, C. M. and B. Gunn  
 1926 *Teti Pyramid Cemeteries*, Cairo.
- Grajetzki, W.  
 2013 "Body Chains in Middle Kingdom Egypt", *Göttinger Miszellen* 237, pp.21-24.  
 2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*, Philadelphia.
- Gashe, V.  
 2007 "An Analysis of the Use of Beads and Amulets as a Mortuary Item in Protodynastic Graves at the Upper Egyptian Site of Badari" in K. Griffin (ed.), *Current Research in Egyptology 2007: Proceeding of the Eighteenth Annual Symposium*, Oxford, pp.71-82.
- Jéquier, G.  
 1921 *Les Frises d'objets des sarcophages du Moyen-Empire*, Cairo.
- Lacau, P.  
 1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire* vol.I, Cairo.  
 1906 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire* vol.II, Cairo.
- Lansing and Hayes  
 1934 "The Egyptian Expedition: The Excavations at Lisht", *The Metropolitan Museum of Art Bulletin* 29, No. 11, Part 2, pp. 4-41.
- Mace, A.C. and H.E. Winlock  
 1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Morris, E. F.  
 2011 "Paddle Dolls and Performance", *Journal of the American Research Center in Egypt* 47, pp.71-103.
- Patch, D.C.  
 1995 "A "Lower Egyptian" Costume: Its Origin, Development, and Meaning", *Journal of the American Research Center in Egypt* 32, pp.93-116.
- Pellerin, F., M. Aubry, D. Percheron, J. Martinez, D. Castelain, M. Gautier and B. Girveau  
 2014 *Sésostris III Pharaon de Légende*, Gand.
- Petrie, W.M.F.  
 1907 *Gizeh and Rifeh*, London.  
 1914 *Amulets*, London.  
 1927 *Objects of Daily Use*, London.
- Pinch, G.  
 1993 *Votive Offerings to Hathor*, Oxford.
- Roehrig, C.  
 2003 "The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes" in N. Strudwick and J. H. Taylor (eds.), *The Theben Necropolis: past, Present and Future*, London, pp.11-13.
- Snape, S.  
 2011 *Ancient Egyptian tombs: the Culture of Life and Death*, Oxford.

Souza, A.

2013 “The Egyptianisation of the Pan-Grave Culture: a New Look at Old Idea”, *The Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 24, pp.109-126.

Tooley, A. M. J.

1989 *Middle Kingdom Burial Customs: a Study of Wooden Models and Related Material* Volume I, University of Liverpool.

Vila, A.

1976 “Les Masques Funéraires”, in J.Vercoutter, *Mirgissa III: Les Nécropoles*, Paris, pp.151-267.

Willems, H.

1988 *Chest of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom Standard Class Coffins*, Leiden.

Wilkinson, A.

1971 *Ancient Egyptian Jewellery*, London.

Winlock, H. E.

1923 “The Museum’s Excavations at Thebes”, *The Metropolitan Museum of Art Bulletin* 18, No.12, Part 2, pp.11-39.

Xia Nai

2014 *Ancient Egyptian Beads*, London.

山崎世理愛

2015 「中王国時代の装身具利用からみた埋葬習慣の地域性」『エジプト学研究』21号 59-78頁。

2016 「エジプト中王国時代における襟飾りの副葬図像表現との比較から見た副葬品選択の一側面」『西アジア考古学』17号 印刷中。



エジプト学研究 第22号

2016年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.22

Published date: 31 March 2016

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist